



# 令和7年度 札幌市小学校教頭会 教育環境整備部 研究報告

教育環境の設計者として：未来を拓く教頭の役割と実践

# 私たちの使命：心豊かでたくましく生きる子どもを育むために



知識や情報、技術が加速度的に発展し、価値観が多様化する現代社会。子どもたちが豊かな人間性と創造性を発揮し、主体的に課題を克服していく力を育むことが、学校の最も重要な役割です。

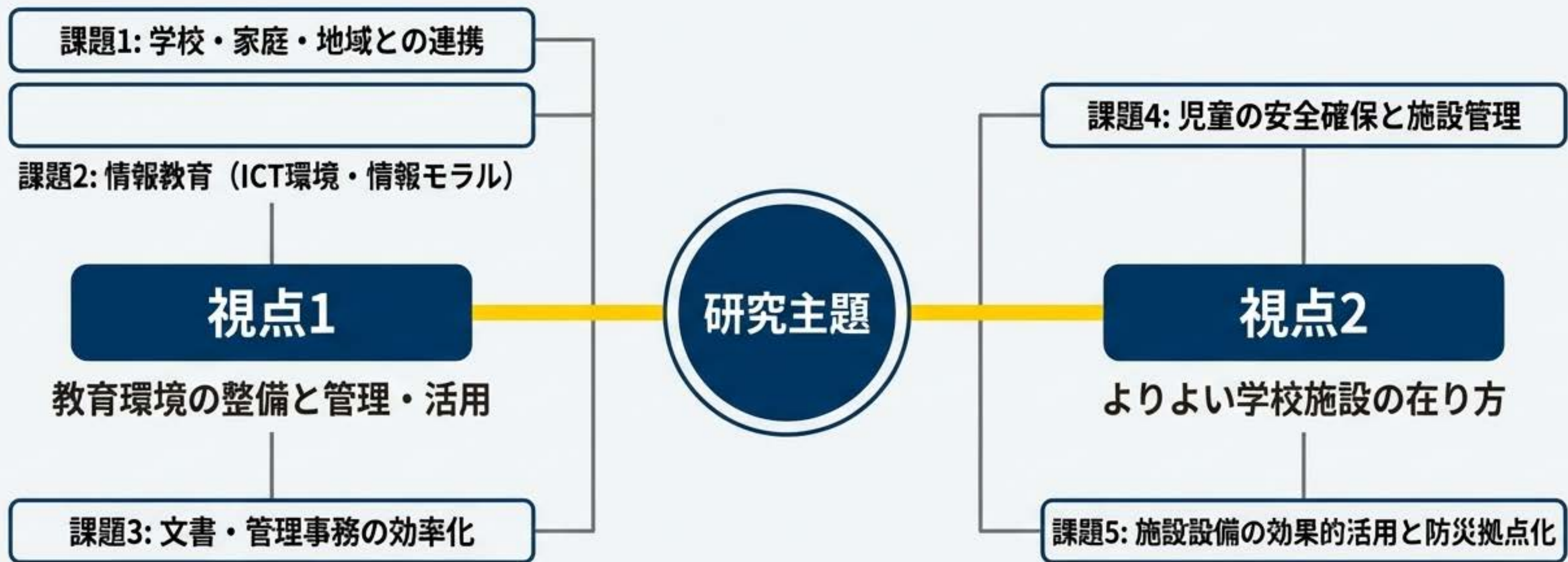
## 研究主題

『心豊かでたくましく生きる子どもを育む教育環境を創造し、整備・活用しながら信頼される学校教育を具現化するための教頭の関わり』



本報告では、この主題を追求する一年間の研究活動から得られた知見と、現場で奮闘する教頭たちの実践知を共有します。

# 研究の全体像：2つの視点と5つの課題



このフレームワークに基づき、各校の実践事例を深掘りし、教頭の具体的な関わり方を明らかにしていきます。

# 視点1：教育環境の整備と管理・活用

---

変化する教育課題に対応し、学びの質を高めるための組織マネジメント

- 課題1：学校・家庭・地域との連携
- 課題2：情報教育（ICT環境・情報モラル）
- 課題3：文書・管理事務の効率化

# 課題1：学校・家庭・地域との連携 — 「接点」を見つけ出し、信頼を築く

Vice Principal Spotlight

## コミュニティ・スクール導入： 「小さく始めて、大きく育てる」

新札幌わかば小学校 教頭 香川 寛樹

Challenge

中学校主導の構造、教職員と地域の温度差など、導入初期の課題。

Action & Insight

- 義務教育学校化との混同を避け、まずは地域との信頼関係構築に注力。
- 教職員と地域の「橋渡し役」として、既存の教育活動と地域連携の接点を探る。
- 児童の声（全校アンケート）を学校運営協議会の議題に反映。



Vice Principal Spotlight

## 地域の願いと教育活動の融合： 小規模校の強みを活かす

上白石小学校 教頭 山中 信明

Challenge

高齢化が進む地域からの多様な要望（合同避難訓練、高齢者との交流）と、教職員の負担と負担との両立。

Action & Insight

- 活動のねらいを明確化し、従来の教育活動と関連付けて「接点」を発見。
- 「顔が見える」繋がりや「本物にふれる」経験をキーワードに、担任の負担を軽減しつつ継続可能な仕組みを構築。
- 教頭が関係機関との調整役を担う（例：防災担当者との連携、ボランティア承諾書の作成）。



# 課題2：ICT環境と情報モラル — 安心・安全な活用文化を根づかせる

## Case Spotlight

新川中央小学校 教頭 田中 敏貴



### 1. 整備体制の確立 (Establish a Maintenance System)

- ICT担当と連携し、故障や不具合への対応を「仕組み化」。



### 2. 教職員のスキル向上 (Improve Staff Skills)

- 実践的な校内研修 (Canva, Padlet等) を企画。
- 得意な職員を活かす「校内ICTメンター制」を導入。



### 3. 情報モラル教育の推進 (Promote Information Literacy)

- 年間指導計画に明文化し、SNSトラブル等の実例を共有。



### 4. 活用事例の共有と蓄積 (Share and Accumulate Best Practices)

- アイデアをストックする「校内共有フォルダ」を運用。
- 教頭が「見つけて・広げて・つなげる」役割を担う。

**Key Insight:** ICT整備・活用・モラル教育は「日常の教育活動の質」に直結する。教頭は、環境づくりと組織マネジメントの両輪で推進する必要がある。

# 課題3：情報資産の管理 — 手順の徹底で、全職員の意識を醸成する

Case Spotlight: 伏古小学校 教頭 横倉 慎

## 1. 申請 (Request)

紙に印刷する際は「個人情報取り扱い申請書」に記載。複数枚印刷時はナンバリングを徹底。



## 2. 運搬 (Transport)

教室からの回収物も含め、指定の袋やケースに入れて移動。「情報資産である」ことを物理的に意識させる。



## 3. 保管 (Storage)

耐火書庫へ保管するものは専用ケースを使用。



## 4. 廃棄 (Disposal)

保管不要なものは即時シュレッダー。WISC検査結果など、長期的に必要な文書はPDF化して保管し、原本は廃棄。



**Key Insight:** 意識は「呼びかけ」だけでは生まれない。具体的な「行為」を伴う手順を設定し、実践を通して意識付けを図ることが重要。

# 視点2：よりよい学校施設の在り方

---

子どもたちの安全を確保し、学びの可能性を広げる物理的環境の構築

課題4：児童の安全確保と施設管理

課題5：施設設備の効果的活用と防災拠点化

# 課題4：児童の安全確保 — 予測と対応で、日常の脅威から子どもを守る

## Spotlight 1

### 施設老朽化と自然の脅威への対応

山の手小学校 教頭 瀧野 隆太

#### Challenges

- 体育館の雨漏り、グラウンドの水捌け不良など、施設の計画的な整備。
- クマの出没（年間14回対応）。

#### Solutions

- 業者と良好な関係を築き、迅速な修繕を実現。
- クマ対応のシステムを構築（下校時チーム編成、クマスプレー購入）。

#### Learnings

対応の長期化による職員の疲弊。地域協力の必要性。

## Spotlight 2

### 用務員との連携による害獣駆除と児童への配慮

栄緑小学校 教頭 荒木 貞行

#### Challenge

校地内に巣を作ったキツネの駆除。

#### Solution

- 用務員が巣を発見し、業者と連携して罠を設置。
- 児童の登校前に罠を確認し、捕獲された様子を見せないよう徹底。

#### Learnings

児童の心理的安全への配慮の重要性。用務員は児童の安全を守る重要なパートナーである。

# 課題5：防災拠点としての学校 — 訓練を通じて見えた成果と課題

Case Spotlight: 大谷地東小学校 教頭 本城 直子

**Initiative:** 避難所運営ゲーム「HUG（冬季Ver.）」を活用した研修の実施。カードを使って避難所で起こる様々な出来事に対応し、避難者を配置するシミュレーション。



## Findings



### 成果 (What Works Well)

学校施設が避難所として有効であることを再認識。

玄関と体育館の近さなど、校舎構造の利点を把握。

頼れる人材（地域、PTA）の存在を確認。



### 課題 (Areas for Improvement)

和式トイレのみの環境。

冬季におけるペットスペースの確保。

開放的な構造による空調・底冷えの問題。

### Role of the Vice Principal

地域施設との情報共有、ニーズに応じた柔軟な対応、運営組織の立ち上げ支援など、地域と学校をつなぐ役割が求められる。

# 【深掘り事例】校舎改築：ビジョンから現実へ（光陽小学校の3年間）

前田小学校 教頭 数野 陽子（前 光陽小教頭）



## Phase 1: 準備・計画 (Preparation & Planning)

- 全職員による2年がかりの廃棄物調査（3回実施）。
- 再利用可能な備品リストを作成し、全市教頭会メールで共有・譲渡。
- 住民説明会の実施。



## Phase 2: 建設・連携 (Construction & Collaboration)

- 毎週水曜に工事定例会を実施し、学校の要望を伝達。
- 工事関係者との交流会や出前授業を企画し、子どもたちとの「顔の見える関わり」を創出。



## Phase 3: 移行・継承 (Transition & Legacy)

- 旧校舎とのお別れ計画：「おとどけアート」と連携し、感謝を伝えるペインティングや映像作品を制作。
- 地域住民や卒業生も参加する学校開放日を設置。
- 工事関係者への「感謝の集い」を開催。

校舎改築は単なる建設事業ではなく、  
学校コミュニティ全体を巻き込む教育プロジェクトである。

# 【深掘り事例】 改築事業から見た、教頭が担うべき4つの力

膨大な業務が同時進行する中で、教頭がプロジェクトを成功に導くために不可欠な要素。



## ビジョンを持つ力 (The Power of Vision)

「どうしたいか」を明確にし、校内の動きと外部との折衝を整理する。



## 予定を組む力 (The Power of Planning)

「引越し」「お別れ」「記念式典」など事柄を分け、先を見通してスケジュールリングする。



## 実現するための発信力 (The Power of Communication)

外部組織との連携や児童の活動企画において、取組の全体像や方向性を明確に発信する。



## 多方面との連携力 (The Power of Collaboration)

業者、教職員、事務職員、用務員など、あらゆる関係者と連携し、労いと感謝の気持ちを忘れない。

## Tangible Outcome

PTAからの記念品として、新旧両校舎が並んだ「二度と見られないレアな写真」を用いたクリアファイルを制作。工事の進捗を見通した計画的な撮影が不可欠だった。



# 研究のまとめ①：多様な実践に共通する原理

## Key Observation

校舎改築、義務教育学校立ち上げ、害獣駆除など、多様な提言があったが、共通していたのは「子どもたちのことを考えた時にどうすべきか」という判断基準。

## The Challenge of Standardization

学校の文化、地域性、設備の違いから、共通化された「教頭マニュアル」の作成は困難。

## A New Approach: A Living Archive

- しかし、事例を検索・参照できる知見の集積は可能。
- 本研究で積み上げられた実践知は、新イントラシステム（NEWSネット）に資料として確実に残し、今後の教頭たちのためのリソースとする。

## Core Principle

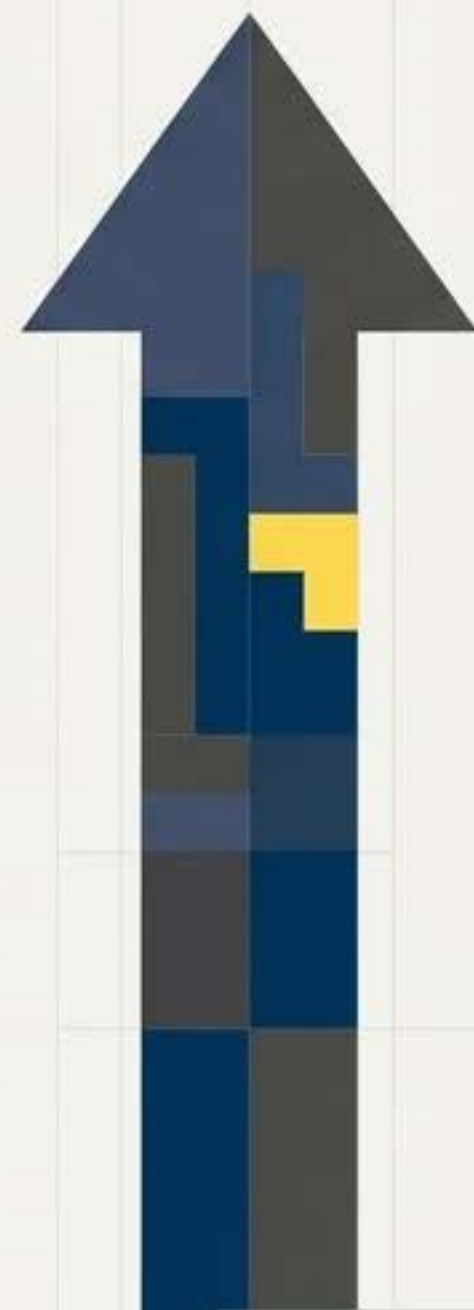
**教育環境整備の研究は、手続き論に終始するのではなく、常に子どもたちを主語として語られるべきである。**

## 研究のまとめ②：次期研究へつなぐ今後の研究課題

今年度の提言を基に、教頭の実践をさらに深化させるため、以下の視点で研究を継続する。

- **地域連携の質的向上**：地域資源を教育課程に統合するためのモデル構築。
- **CSの定着と発展**：小中連携の実効性を高める組織的支援体制の構築。
- **ICT活用文化の深化**：校内ICTメンター制の効果検証と持続可能な運用方法の探究。
- **施設整備におけるマネジメント**：教頭による施設整備の実践事例の比較研究と、児童の心理的ケアの検証。
- **情報資産管理の体系化**：デジタル化に伴うリスクマネジメントの体系化と研修プログラムの開発。

これらの研究課題は、教頭の実践を理論的に裏付け、今後の学校経営の質向上に寄与する。



# 結論：私たちは、子どもたちのための「教育環境の設計者」である

3年間の研究を通じて見えてきたのは、物品管理や施設修繕といった個別の業務を超え、学校全体の教育環境をデザインする教頭の姿である。

## 副頭長の核心Role

- 校長の補佐役として、現場の声を吸い上げ、ビジョンを実現する中核を担う。
- 教職員、保護者、地域、関係機関との連携の要となり、リーダーシップを発揮する。
- 教職員の負担を軽減し、児童一人ひとりが安心・安全に学び、成長できる環境を創出する。

変化を力に変える未来志向の教育環境整備を通じ、私たちの究極の目標である「心豊かでたくましく生きる子ども」を育んでいきたいと思います。

